第６学年「社会」学習指導案

授業者　佐藤　孔美

２月２０日（木）　２階Ｂ室　９：００～９：４０

１　題材名　　「18 才選挙権の意義について考える①」

２　題材について

（１）【場面設定】：「時事的な社会事象について，他者との差異や葛藤を生じる問題」を扱う内容

「18 歳選挙権は，みんなが幸せになる社会を実現することにつながるのであろうか。」

（２）18 才選挙権とその低投票率から選挙権の意義について考える

新学習指導要領の改正で，6 年生の社会科の学習は，今までの古代から現代へという時代の経過より政治単元から指導することに至った。公職選挙法改正案により，2016 年（平成 28 年）に選挙権年齢が 18 才以上に引き下げられたことが，大きな要因の一つである。18･19 才に投票権が初めて認められた第 1 回目の選挙では，投票率は 46.78％であったのに対して，2 回目の投票率は 40.49％，3 回目の投票率は 31.33％と年々低下している。18 才に選挙権が引き下げられた理由は，少子高齢化の社会の到来を見据えた政治政策である。しかし高齢者の投票率が高いという選挙結果を踏まえると，高齢者の支持する政策が優先され，若者に対する政策が後回しになり，みんなが幸せになる社会の実現が困難な状況が続くという現実に対して，もっと皆で議論する必要性を感じる。少子高齢化社会という予測困難な時代の到来はすでに始まっている。18・19 歳の人たちの年々低下している投票率は，決して「人ごと」ではないのである。18 歳に選挙権を引き下げたことは，果たしてみんなが幸せになる社会を実現することにつながるのであろうか。この話し合い活動を通して，「18 歳選挙権の意義」について，子どもたちの 6 年後を見据えて真剣に考え，子どもたちと一緒に民主主義社会を生きる国民の一人として，考える機会をもちたい。

（３）具体的な「判断の基準」から概念化された「判断の規準」へ

社会的論争問題の中には，社会の中の様々な立場の人による多様な考え方が存在している。「社会」の学習は，様々な立場の人たちが幸せになれるような社会のあり方を考えていく教科であると位置付ける以上，様々な具体的な「判断の基準」の中から，様々な立場の人たちが幸せになれるような概念化された「判断の規準」を対話を通して一人一人が友だちの考え方に共感したり，批判したりしながら，問い直していきたいと考えている。

３　学習指導計画　（全８時間）（詳細は当日案にて）

第一次　日本の選挙や投票率について考えよう。

① 2016 年の投票率とその後 3 年の年々下がる 18･19 才の投票率の変化を見てその要因を考える。

②若者の投票率がなぜ低いのかを予想し，大学生にインタビューを実施しデータをまとめる。

③ 60 才代の投票率の高さや海外の若者の投票率を見て，その理由や背景について考える。

④「18 歳に選挙権を引き下げたことは意義あることだったのだろうか」について 1 回目の価値判断を行い，「判断の基準（規準）」について考える。

第二次⑤～⑧　18 歳選挙権の意義について考えよう。（第二次の詳細は 127 ページ）

４　本時について（５時間目）

（１）本時のねらい

18 歳に選挙権を引き下げたことは本当に意義あることかどうかについて，根拠に基づいた自分の考えを述べたり，友だちの考えに付け足したり，異なる意見を述べたりしながら，自分の考えを問い直す。

（２）予想される本時の展開

予想される子どもの姿	留　意　点
○本時の課題を確認する 【18 歳に選挙権を引き下げたことは，意義あることだったのだろうか。】 【意義はなかった】 ・18 歳で誰を選ぶのかを決めるのはまだ難しい。・若者に政治のことはまだ分からないので引き下げなくてもよかった。・投票率は年々下がっているから意味無し。 【意義はある】 ・小学生だって社会の問題を判断してきた。できないということはない。・子ども時代から社会の中の問題を考える学習をしていけば，18 歳に選挙権が与えられても大丈夫。・人口が減少しこれからの社会の担い手の自分たちが政治に目を向けないとだめ。・スウェーデンの若者の投票率は 84.9％もある。18 才になった若者にできないはずがない。	・具体的な「判断の基準」から概念化された「判断の規準」の議論の深まりを促すように助言する。